一正月三箇日之間、與力ハ麻上下、同心ハ元日計之事、○中略

已上

右兩通ハ、大坂在番大番頭手前之扣寫、

〔政談七〕人扱　一年始の禮に御老中の宅へ參る日限を、御目附より觸る事、近年始りたり、是又間違也、老中なりとも不和ならん人亦持寄あらば、年始の禮に參るまじき也、御老中とても傍輩なる故也、夫を御目附より觸る時は、相對の禮を公法にするなり、御目付は公儀の役人也、公儀の役人は、相對の禮を差圖する事有まじきこと也、是又昔は是なき事なるに、近年御老中の使ひものと成て、己が作法を咎むる職掌なる事を忘れたるより、かくの如く成間違は出來たる也、

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲三年正月壬申、○三日法王道鏡居西宮前殿、大臣已下賀拜、道鏡自告壽詞、

〔法成寺攝政記〕寛弘二年正月一日庚戌、家拜禮、上達部六人、殿上人地下四位並三十餘人、諸大夫六十七人事了、

〔小右記〕治安四年○萬壽元年正月一日庚寅、未刻宰相來云、參關白御許拜禮、卿相相引參禪室拜禮了、

〔左經記〕長元八年正月一日丙戌、午刻參關白相府、座堀河第頃之春宮大夫以下六位以上、於南庭再拜、主閤答拜畢、

〔中右記〕康和三年正月一日壬戌、午刻參右大臣殿、東三條對大后同御也執柄之後必可有拜禮、依庭濕於西透廊有拜禮、二位中納言、經實中宮權大夫、能實右兵衛督、師賴右大辨、宗忠大藏卿、道亨上已一列、殿上人頭辨重資以下十餘人、一列諸大夫之一列之末、六位上官列立、依廊中狹少二拜、若大納言被參者、可有答拜由雖有其議、不被參入也、人々渡南庭、右大臣殿出御、從東門率公卿令參大殿給、枇殿杷此間小雨、仍無拜禮、

〔法性寺關白記〕保安四年正月一日、有拜禮事、余在寢殿簾中、大納言以攝津守盛家朝臣示云、於對南庭可拜歟、將於寢殿前可拜歟、上達部乏少之時、於對南庭有此事、定有便宜歟、余答、殿下御時無御答